

老子——人物と書籍

澤 田 多 喜 男

前 言

この問題を扱うにあたっては、書籍の思想内容などにたちいつて考察することは慎重でなければならぬ。とりあえずは書かれた事實に即して、主観的な接近は避けるべきであろう。老子の人物についても『史記』の傳記を平心に讀むならば、どれほどの信賴がおけるものは自ずから解るはずであろう。書籍についても、かつて武内義雄『老子の研究』(1)では、多くの周邊の資料を使いながらも、現代の論理的思考からは不自然であるとして、錯簡だと稱して大幅な改編を行い、その成果は氏の『全集』にまで入っている。しかしながら、馬王堆出土の帛書の出現によって改編したことの決定的な誤りであることが明らかになった。帛書では破損して判讀不可能な箇所はともかく、従來の『老子』(以下、『老子』と稱す。およそ版本として傳承されたものを指す)の文章と、多少の文字や章序の相違はあるものの、錯簡などありえないから氏の努力は水泡に歸したといえる。私たちが眼にする古代の文獻は、いわばこま切れた文章が多く、すべてが論理的に一貫した文章は少ないといえよう。先秦の儒家系の書籍などは随分整っていて、よほど整理者が手を加えて整えたのではないかと思われる。『荀子』などかなり篇名に即した文章が整っているが、それでもかなり篇名とは不自然な内容のものがある。『春秋繁露』でもかなり断片的で一貫しない文章

が認められる。帛書でも《徳》《道》と名づけられながらも、それぞれの書乃至は篇に「道」も「徳」も混入して説かれている。かつて武内義雄『老子原始』では『老子』には、道家言ばかりでなく縦横家言や兵家言や法家言なども混入していること、そうした諸家の文章を秦漢の際にまとめたものが『老子』だと指摘しているが⁽²⁾、それは間違いのない事實であると考えられる。そうしたさまざまな思想の混在を認めたように、各章の文章もあるがままに認めて『老子』という書籍を扱うべきであつたと思う。ただし、あるがままとはいふものの單純に鵜呑みにするということではない。どこをどう検討するかは、各人が自分のできる限りの知識で行うほかない。

一 老子傳考

老子の傳記は、『史記』の列傳にある。しかし列傳にみえる戰國の思想家たちの傳記はいずれもあまり信用できない。例えば莊子の傳記のばあいなど、『莊子』にみえる二種類の莊子説話を一部づつ繋げて作られている。老子のばあいも同様にあまり信用できない。第一に三人の老子ではないかとされる人物を擧げている。すなわち李耳・老萊子・太史儋である。司馬遷は老子が誰であつたかに確信がもてなかつたのであろう。その中で李耳の傳記が最も詳しく、姓・名・字から出生地の郷・里まで記している。すなわち次のように始まる。

老子者、楚苦縣厲鄉曲仁里人也。姓李氏、名耳、字聃⁽³⁾。周守藏室之史也。孔子適周、將問禮於老子⁽⁴⁾。老子曰「子所言者、其人與骨皆已朽矣、獨其言在耳。且君子得其時則駕、不得其時則蓬累而行。吾聞之、良賈深藏若虛、君子盛德容貌若愚。去子之驕氣與多欲、態色與淫志、是皆無益於子之身。吾所以告子、若是而已。」⁽⁵⁾孔子去、謂弟子曰「鳥、吾知其能飛、魚、吾知其能游、獸、吾知其能走。走者可以爲罔、游者可以爲綸、飛者可以爲矰。至至於龍、吾不能知其乘風雲而上天。吾今日見老子、其猶龍邪。」⁽⁶⁾老子脩道德、其學以自隱無名爲務。居周久之、

見周之衰、迺遂去。至關、關令尹喜曰「子將隱矣、強爲我著書、」於是老子迺著書上下篇、言道德之意五千餘言而去、莫知其所終。

或曰、老萊子亦楚人也、著書十五篇、言道家之用、與孔子同時云。

蓋老子百有六十餘歲、或言二百餘歲、以其脩道而養壽也。(7)

自孔子死之後百二十九年、而史記周太史儋見秦獻公曰、「始秦與周合、合五百歲而離、離七十歲而霸王者出焉。」或曰儋即老子、或曰非也、世莫知其然否。老子、隱君子也。

老子之子名宗、宗爲魏將、封於段干。宗子注、注子宮、宮玄孫假、假仕於漢孝文帝。而假之子解爲膠西王卬太傅、因家于齊焉。

世之學老子者則紕儒學、儒學亦紕老子。「道不同不相爲謀」(『論語』衛靈公40の語)、豈謂是邪。○李耳無爲自化、清靜自正(8)。(『史記』卷六十三、老子韓非列傳)

この傳記で、先ず氣がつくのは、どこで亡くなったか不明で、歴史的に年代の確實な君主などとの接点もない人物でありながら、國や郡縣はともかく郷里まで明確にわかっているのは不思議である。しかも、その縣・郷・里の名稱が、「苦」は苦しい、「厲」は癩病に通じる(『莊子』齊物論篇に「厲與西施、通爲一」とみえ、美人と對比する醜い人物の代表とされている)、「曲仁」は儒家の最高の道德原理「仁」に關係し、曲がった仁、或は仁を曲げた、の意味に通ずる、儒家批判に通ずるものである。これは随分ひねくれた縣・郷・里の名稱であり、作爲的だと考えられる。従つてこの出身地は信用できない。

老子が「禮」に詳しい者とされ、それを學ぶべく孔子は彼のいる周にまで訪れるが、老子に會見して忠告され、そのことばに感心してか、老子の印象を萬能の能力をもつ「龍」のごとき人だと弟子に語っている。老子と孔子との會見は儒家側の書籍にもみえるが、老子が「禮」に通じており、孔子が彼に「禮」についての教えを乞うたというのは、どこ

まで事實かは明らかではないが、『史記』に、

孔子年十七、魯大夫孟釐子病且死、誠其嗣懿子曰「孔丘、聖人之後、：今孔丘年少好禮、其達者歟。吾即没、若必師之。」及釐子卒、懿子與魯人南宮敬叔往學禮焉。是歲、季武子卒、平子代立。：魯南宮敬叔言魯君曰「請與孔子適周。」魯君與之一乘車、兩馬、一豎子俱、適周問禮、蓋見老子云。辭去、而老子送之曰「吾聞富貴者送人以財、仁人者送人以言。吾不能富貴、竊仁人之號、送子以言、曰（聰明深察而近於死者、好議人者也。博辯廣大危其身者、發人之惡者也。爲人子者毋以有己、爲人臣者毋以有己。）」孔子反于魯、弟子稍益進焉。（卷四十七、孔子世家）とみえる。また特に孔子が老子に教えを乞うという説話はどのような状況で作られたものか検討が必要であろう。すなわち司馬遷の活動期は、儒家思想よりも道家系の黄老思想が支配者層に盛行していたという状況を考慮しておくことである。

また老子の學問や著作についても、傳記に示された著作の内容や形態・量が所謂『老子』と極めて類似するところから、『老子』の著者であると一般には考えられ、司馬遷もそう考えていたふしも認められる。しかし、そうではないと考えていたらしい點もある。事實、『史記』にはしばしば所謂『老子』の語句を老子或いは老氏のことばとしているが、そうでない事實もあることは、やはり注意すべきであろう。さらに「禮」に通じており、孔子がその教えを乞いに周へ行き、教訓を與えられ、しかのみならず老子を讚嘆するということは、いかなる事情からそうした説話が作成されたのかは不明である。讚嘆はともかく教えを乞う話は儒家系の書籍にもみえている。

しかしいずれにしても最も詳細な傳記は李耳であり、かつその子孫の系譜まで記されていることからして、また五千餘言の「道德の意」を述べた著作があるとの記述は現存する書籍との整合性もあり、決定的ではないにしても、彼についての傳承がもつとも信頼できると、司馬遷は考えていたと思われる。しかし決定的に李耳が老子であり『老子』に近い著作の著者だと確信をもっていたかどうかは明らかではない。そのことは種々あるが、次に示す『史記』をみれば自

ずから明らかになろう。すなわち、

①或曰「天道無親、常與善人」(79)。若伯夷・叔齊、可謂善人者非邪。積仁絜行如此而餓死。…余甚惑焉、儼所謂天道、是邪非邪。(卷六一、伯夷列傳)

②太史公曰、女無美惡、居宮見妒、士無賢不肖、入朝見疑。故扁鵲以其伎見殃、倉公乃匿跡自隱而當刑。緹縈通尺牘、父得以後寧。故老子曰「美好者不祥之器」(31)、豈謂扁鵲等邪。若倉公者、可謂近之矣。(卷一〇五、扁鵲倉公列傳) * (なお「美好者不祥之器」は、『老子』には「夫佳兵者、不祥之器」(38)とあるが、それに相當するか。帛書では「佳」字がない。)

③老氏稱「上德不德、是以有德。下德不失德、是以無德」(38)。「法令滋章、盜賊多有」(57)。(卷一二二、酷吏列傳)

④太史公曰、…故曰「聽訟、吾猶人也、必也使無訟乎」。「下士聞道大笑之」(41)。非虛言也。(卷一二二、酷吏列傳)

⑤居三日、宋忠見賈誼於殿門外、乃相引屏語相謂自歎曰、道高益安、勢高益危。…爲人主計而不審、身無所處。此相去遠矣、猶天冠地屨也、此老子所謂「無名者萬物之始」(一)也。(卷一二七、日者列傳)

⑥老子曰、「至治之極、隣國相望、雞狗之聲相聞、民各甘其食、美其服、安其俗、樂其業、至老死不相往來」(80)。必用此爲務、輒近世塗民耳目、則幾無行矣。(卷一二九、貨殖列傳) (◇括弧内の數字は『老子』の章序數)

などとみえていて、伯夷列傳や酷吏列傳などでは老子のことばとはされておらず、或る人または或る書のことばともとれる。貨殖列傳の老子のことばは、『老子』の前半がなく、『老子』にない「至治之極」の句が加っている。これは『莊子』に「至德之世」の有様として「昔者容成氏、大庭氏、伯皇氏、中央氏、栗陸氏、驩畜氏、軒轅氏、赫胥氏、尊盧氏、祝融氏、伏羲氏、神農氏、當是時也、民結繩而用之、甘其食、美其服、樂其俗、安其居、鄰國相望、雞狗之音相聞、民至老死

而不相往來、若此之時、則至治已」(胙篋)として、老子のことばとしてではなく胙篋篇の作者のことばとして記されている。貨殖列傳では「至治之極」ということばがあるが、この『莊子』のことばを取ってきて、老子のことばとしたのではないかと推測される。このことは『老子』のことばが、伯夷列傳では老子のことばとされていなく、関係があるろう。どうやら司馬遷は『老子』は老子の著作とは確信をもつて考えておらず、揺れ動いていたのではないかと思われる。

そもそも姓に子をつけることは、孔子を初めとして一般的に行われるし、先學の指摘するように匡章や再有が童子、有子と呼ばれ、子の上に名をつけて稱する例も稀にはある。しかし李耳なる人物が何故に老子と呼ばれるのかについては、すでに疑問が提出されている。しかし十分納得される説明はなされていない。六朝末から唐代にかけての資料を示す注に見えるような、奇怪な説明が生まれることとなつたのもそのためではないかと思われる。姓が李、名が耳、字が聃であつて、その人物を老子と稱するのは餘りにも不自然だからである。それでは李耳乃至老子はどう考えたらよいか。

唐の張守節の注『正義』の一部を示せば、「…李母八十一年而生」(『朱韜玉札』や『神仙傳』)とか、「李母懷胎八十載、逍遙李樹下、迺割左腋而生。」(『玄妙内篇』)とか「玄妙玉女夢流星入口而有娠、七十二年而生老子。」(同上)などと記す書籍を引用し、李耳が(老子)と呼ばれる理由を殊に釋迦の誕生説話をも用いてまで、説明しようとする苦心しているさまが明らかである。『史記』の本文には老子と李耳との關聯をつけようとする意圖はまったく見當たらぬのは、兩者を結びつけることが元來無理があつたからだと考えられる。そうでなければ初めから兩者の關聯を明白に述べているはずであろう。

すでに觸れたことであるが(9)、近年でも次のような指摘がある。胡適は、名は聃、字は耳、別の字が「老」ではないかとして、春秋時代の字が先で後に名のくる例を擧げる。さらに字の下に「子」をつける例もあるとして、孔子の弟子の場合では冉求の字は有で、有子と呼ばれている例を擧げる。或いはまた「老」は姓ではないか、古代では姓と氏は

區別されたが、後にそれが混同されたのであって、老子の姓は「老」であつたから、老聃とか老子と呼ばれたのだともいう（以上、胡適「老子略傳」（『古史辨』第四冊下所收、一九六三年、一九三八年初版）。また唐蘭は、古書に見える老子の姓は李ではない、『史記』の老子傳は後人の改竄を経ている、博識な鄭玄すら「老聃、古壽考者之號也、與孔子同時」（『禮記』曾子問注）と云つて李耳説を取つていない、の三點を舉げて「姓李氏、名耳」は信用できないとする（以上、唐蘭「老聃的姓名和時代考」（『古史辨』第四冊下編所收、一九六三年、一九三八年初版）。さらに羅根澤は、老子は太史儋に他ならないという（羅根澤「老子及老子書的問題」（『古史辨』第四冊下編所收、一九六三年、一九三八年初版）。譚戒甫は、『世本』『左氏傳』杜注『史記』などを考慮しながら、先秦で老子と呼稱されるのは、老萊子と老聃の二人だとし、周の老陽子の子孫が老聃ではないかという（譚戒甫『史記』老子傳考正」（『古史辨』第六冊下編所收、一九六三年、一九三八年初版）。

次に傳記にでてくる老萊子については、

亦楚人也、著書十五篇、言道家之用、與孔子同時。

とあるだけで、著書は量的にも所謂『老子』とは異なる。

なお、老萊子については、『莊子』雜篇に次のように見える。

老萊子之弟子出薪、遇仲尼。反以告曰、有人於彼、修上而難下、末僂而後耳、若營四海不知其誰氏之子。老萊子曰、是丘也。召而來。仲尼至。曰、丘、去汝躬矜、與汝容知、斯爲君子矣。仲尼揖而退、蹙然改容而問曰、業可得進乎。老萊子曰、夫不忍一世之傷、……（外物）

この資料から見る限り、老萊子は孔子に忠告する先輩的な人物であり、孔子への老萊子の忠告は、先に見た李耳の孔子への忠告の一部と酷似すると指摘されている。司馬遷の莊子の傳記などを見ると、先にも觸れたが『莊子』に見える複

數の莊周説話を断片的に取り上げて繋ぎ併せて彼の傳記を作成している。そうした點を考えると、老子の傳記も幾つかの断片的説話を参考にして作成されたものかもしれない。とにかく、『史記』にみえる先秦の思想家たちの傳記はあまり信用できないというほかない。

また『史記』の仲尼弟子列傳冒頭近くには、

孔子之所嚴事、於周則老子。於衛、蘧伯玉。於齊、晏平仲。於楚、老萊子。於鄭、子産。於魯、孟公綽。

などとあつて、老子と老萊子は明白に別人だとしている。ところが老子本傳では、老萊子について單に同時代人とのみ記されていて、孔子との關係については何ら觸れていないのは對照的である(10)。

なお、上引の句に續く「蓋老子百有六十餘歳、或言二百餘歳、以其脩道而養壽也」の文は、老萊子についてのことかどうか不明である。人によつては太史儋の記述の後に、置かれるべきだとする。つまり最初にみえる李耳についての記述だといふのである。確かに一理あるといえる。

周太史儋については、なんともいえないが、著作についての言及がなく、その姓も不明であり、その發言も『老子』とは何の關係もない。ただ、孔子の後輩ということ、『老子』に仁義批判がみえるところからこの著作が孔子より後のものであり、その點で年代的に合致することに著目して、老子との接點をみる向きもある。太史儋について、「自孔子死之後百二十九年、而史記周太史儋見秦獻公」とあり、秦の獻公(在位二十三年、前三八四—前三六二)に會見しており、孔子の死後百二十九年頃の人とされ、著作については言及がない。しかも「或曰儋即老子、或曰非也、世莫知其然否」と附言し、老子と呼ばれる人物かどうか評價が定まっていなことを示している(11)。また續けて「老子、隱君子也」とあるのは、やはり儋のことについての言及かどうかは不明である。

また儒家と道家との確執を述べた後「李耳無爲自化、清靜自正」の句は、唐の司馬貞のいうように、太史公の評語で

あろう。この傳記の中には『老子』のことばは、まったくみえず、老子のことばとしての引用もないのに、こののみ「我無爲而民自化、我好靜而民自正、」(『老子』第五十七章)に類似のことばがあるのは、不自然と思われるからである。

ところで、傳記について老子のと孔子のとを單純に比較してみると、孔子のばあいは『論語』にみえる孔子のことばを多く引用しているのに對して、老子のばあいは『老子』のことばはまったく引用されていないのは不可解というほかない。老子と同じ『史記』の列傳にある韓非子の傳記でさえ、彼の自著かどうか現在では疑問が出されている『韓非子』の説難篇を引用していることを、考慮するとますます不可解である。『老子』は老子の著作であるかどうか検討が不可避であろう。

次に、系譜について孔子と老子を比較してみると、先學もすでに指摘しているように、

○(1) 老子(李耳) — (2) 宗(魏將、封於段干) — (3) 注 — (4) 宮 — (5) ○ — (6) ○ — (7) ○ — (8)

假(仕於孝文帝) — (9) 解(膠西王卬太傅) (12)

○(1) 孔丘 — (2) 鯉(字伯魚) — (3) 伋(字子思、年六二。作『中庸』) — (4) 白(字子上、年四七) — (5)

求(字子家、年四五) — (6) 箕(字子京、年四六) — (7) 穿(字子高、年五一) — (8) 子慎(年五七、魏相)

— (9) 鮒(年五七、陳王涉博士) — 鮒弟 — (10) 子襄(年五七、孝惠帝博士、長沙太守) — (11) 忠(年五七) — (12)

武 — 延年及 — (13) 安國(今皇帝博士、臨淮太守) — (14) 卬 — (15) 驩

老子の子孫がいずれも長命であったとしても、老子の第九代目の子孫が、高祖の孫である文帝期の膠西王の太傅となつたとされるのに對して、孔子の第十三代目の子孫がはば同世代の君主に仕えていることになる。老子が孔子の先輩だとするとやはり繼承する世代數が不自然だと考えられている。こうした點でも李耳が老子で孔子の先輩だと考えるのは無理がある。従つて李耳が老子であることは不可能ではないかと思われる。孔子の先輩とされる李耳が『老子』

の著者と考えるのも不可能である。ただ「老子廼著書上下篇、言道德之意五千餘言而去」とある記述は、『老子』と類似する點で、李耳著者説にかすかな可能性を残している。しかし最終的には次の書籍についての考察を待たねばならない。

二 『老子』考

『老子』では、王弼注及び河上公注が注釋の代表とされて使用され、特に魏の王弼の『周易』注が象數『易』に對する義理『易』として尊重されるようになる、王弼注『老子』が一般的に通用するようになる。河上公は前漢の文帝期の人物だとされ、唐・陸德明撰『經典釋文』や唐・魏徵等撰『隋書』經籍志では最古の注釋とされるが、前漢末の事情を伝える『漢書』藝文志には記載されていない。前漢期の書籍であれば當然記載されているべきなのに、なぜ南北朝以降になって圖書目錄に記載されるようになったのか不明である。いま唐・魏徵等撰『隋書』、卷三十四、經籍志三 子部をみると、

『老子道德經』二卷（周柱下史李耳撰。漢文帝時、河上公注。梁有戰國時河上丈人注『老子經』二卷、漢長陵三老毋丘望之注『老子』二卷、漢徵士嚴遵注『老子』二卷、虞翻注『老子』二卷、亡。）

『老子道德經』二卷（王弼注。梁有『老子道德經』二卷、張嗣注；『老子道德經』二卷、蜀才注。亡。）

とあり、最古の注釋は河上公注で、「治身治國之要」を説くとされる政治的養生家的な注釋で現存する。他にも漢代の注釋はあつたが現存しないという。ただ前漢末の書籍の状況を伝える『漢書』藝文志には、河上公注は記載がないので、この注釋が前漢のものかどうか疑問視され、魏の王弼注が現存する完全な最古の注だと考えられている。魏の王弼注は、「妙得虛無旨」とされる「無」を重視したいわば哲學的注釋である。

次いで遡って唐・陸德明撰の『經典釋文』序をみると、

…爲關令尹喜說道德二篇、尚虛無無爲。…

〔河上公〕作『老子章句』四篇以授文帝。言治身治國之要。其後談論者莫不宗尚玄言、唯王輔嗣妙得虛無之旨。今依王本博采衆家以明同異。

『河上公章句』四卷（不詳名氏）

『毋丘望之章句』二卷（字仲都、京兆人。漢長陵三老）

『嚴遵注』二卷（字君平、蜀都人。漢徵士。又作『老子指歸』十四卷）

『虞翻注』二卷

『王弼注』二卷（又作『老子指略』一卷）

『鍾會注』二卷

…

『蜀才注』二卷

『釋慧琳注』二卷

『想余注』二卷（不詳何人。一云張魯、或云劉表魯、字公旗、沛國豐人、漢鎮南將軍關内侯）（13）

とあつて、河上公の『老子章句』四篇を挙げながら、王弼注本を基本とすると明言している。また序では書名は單に『老子』であるが本文の方では、『隋書』經籍志と同じく「老子道經音義」「老子德經音義」と「道經」「德經」という稱呼を使っている。『漢書』顏師古注にもこの呼稱がみえることは、すでに別の拙稿で觸れている。

さらに遡つて後漢・班固撰『漢書』卷三十、藝文志、諸子略・道家の項には、

『老子鄰氏經傳』四篇。（自注、姓李、名耳、鄰氏傳其學。）

『老子傅氏經說』三十七篇。（自注、述老子學。）

『老子徐氏經說』六篇。(自注、字少季、臨淮人、傳『老子』。)

『劉向說老子』四篇。

『老萊子』十六篇。(自注、楚人、與孔子同時。)

『鷓冠子』一篇。(自注、楚人、居深山、以鷓爲冠。)(師古曰、鷓鳥羽爲冠。)

『黃帝四經』四篇。

…右道三十七家、九百九十三篇。

とあつて、『傳』や『說』はあるが、『注』はない。勿論、河上公の注本も記載されていない。従來は王弼注が現存する完全な注釋の最古のものと考えられているが、最近では平明な注釋の河上公注の方が古いのではという見直しが検討されているといわれているが、究明の状況は明らかではない。

次いで時代はいずれも明確ではないが、戰國末に死没した韓非子より後の誰の著作かは不明な『韓非子』解老・喻老篇などは、断片的ではあるが最古の解説乃至は注釋であるといえる。これらの篇の十分な検討はまだなされておらず、今後の『老子』研究の残された課題といえよう。

前漢武帝期頃の状況を伝える『史記』、戰國末から漢代にかけての著作とされる『莊子』、さらに前漢の淮南王劉安の食客らによる著作と考えられる『淮南子』の諸篇、集中的には道應篇などに『老子』理解の一端が窺える。

さて『史記』での『老子』の文章をみると、第七十九章のごときは、老子のことばではなく、或る人のことばとしているのは、司馬遷は誰のことばと考えたのであろうか。このことは、著作年代不明の『韓非子』解老・喻老篇や後にみる『莊子』で『老子』の文が、いずれも少しの例外を除いて(老子)の名稱を示さず、「故曰」として引用されていることや馬王堆出土の帛書での(老子)という書名の缺如と關聯するものと思われる。特に帛書は、前漢文帝期の筆寫とされる乙本で『老子』とほぼ同文の書籍でありながら、(老子)とは異なる書名が記されていることを考慮すると、先にも

觸れたように司馬遷は『老子』と同文の書籍が（老子）であつたか否か確信がもてず、揺れ動いていたのではないかと思われる。

次に司馬遷の『史記』より少し以前の淮南の食客の著作とされる『淮南子』では（一部のみ引用。）（）括弧内は『老子』章序、道應篇所引の『老子』章序は末尾に記す、

故老聃之言曰「天下至柔馳騁天下之至堅。出於無有、入於無間、吾是以知無爲之有益」（43）。（原道）

太清問於無窮曰、子知道乎。∴太清仰而歎曰、然則不知乃知邪。知乃不知邪。孰知知之爲弗知、弗知之爲知邪。無始曰、道不可聞、聞而非也。道不可見、見而非也。道不可言、言而非也。孰知形之不形者乎。故老子曰「天下皆知善之爲善、斯不善也」（2）。故「知者不言、言者不知」（56）。∴故老子曰「言有宗、事有君。夫唯無知、是以不吾知也」（70）。白公之謂也。∴故曰「法令滋彰、盜賊多有」（57）。此之謂也。（道應）

惠子爲惠王爲國法、已成而示諸先生、先生皆善之。奏之惠王、惠王甚說之、以示翟煎、曰善。惠王曰、善、可行乎。翟煎曰、不可。惠王曰、善而不可行、何也。翟煎對曰、∴治國有禮、不在文辯。故老子曰「法令滋彰、盜賊多有」

（57）。此之謂也。田駢以道術說齊王、王應之曰∴田駢對曰「臣之言無政、∴此老聃之所謂（無狀之狀、無物之象）（14）者也。」（道應）

白公勝得荊國、不能以府庫分人、∴故老子曰「持而盈之、不知其已。揣而銳之、不可長保也」（9）。（道應）

趙簡子以襄子爲後、∴故老子曰「知其雄、守其雌、其爲天下谿」（28）。（道應）

道應篇所引の『老子』章序（10, 4, 73, 74, 28, 52, 9, 25, 13, 55, 1, 36, 5, 3, 22, 70, 22, 45, 4, 78, 78, 27, 2, 21, 7, 39, 23, 28, 20, 27, 71, 52, 莊子, 38（72）, 43, 43, 47, 27, 16, 75, 慎子, 58, 18, 37, ）とあるように、『老子』のことは、ほぼ「老子」或は「老聃之言」として引用されている。この事實は、『淮南子』の時代或は地方或はある知識人集團では、『老子』とほぼ同文の書籍が（老子）という名稱で通用していたことを物語ると

いえよう。

また顧頡剛は、『史記』より少し成立年代の早い『淮南子』は、黄老思想の最盛期であったので『老子』の引用が非常に多く、原道篇などは『老子』中の語を組み立てて自分の文章を作っていて、一つも「老子曰」とは稱していないことは有り得ることだとしながらも、同篇後半の箇所で、『老子』のことばを老聃のことばとして指摘することゝも指摘する。更に齊俗篇の場合も暗に『老子』のことばを使用して文章を作るとともに、「故老子曰、不尚賢（2）。」と明示する例があることも指摘している。（14）

ところが、次に『韓非子』をみると、解老篇や喻老篇では、

徳者、内也。得者、外也。「上徳不徳」、言其神不淫於外也。：故曰「上徳不徳、是以有徳。」所以貴無爲無思爲虚者、謂其意無所制也。：故曰「上徳無爲而無不爲也。」仁者、謂其中心欣然愛人也。：故曰「上仁爲之而無以爲也。」義者、君臣上下之事、父子貴賤之差也。：故曰「上義爲之而有以爲也。」禮者、所以貌情也、羣義之文章也。：故曰、禮以貌情也。：凡人之爲外物動也、不知其爲身之禮也。：故曰「上禮爲之而莫之應。」：故曰「攘臂而仍之。」道有積而徳有功、徳者道之功。：故曰「失道而後失徳、失徳而後失仁、失仁而後失義、失義而後失禮。」禮爲情貌者也、文爲質飾者也。：故曰「禮薄也。」：故曰「禮者、忠信之薄也、而亂之首乎。」先物行先理動之謂前識、前識者、無縁而忘意度也。：故曰「道之華也。」：是以曰「愚之首也。」故曰「前識者道之華也、而愚之首也。」（以上、38）：故曰「去彼取此」（38・72）。

人有禍則心畏恐。：故曰「禍兮福之所倚。」夫縁道理以從事者無不能成。：故論人曰「熟知其極。」：故曰「迷。」故曰「人之迷也、其日故以久矣。」所謂方者、内外相應也、言行相稱也。：故曰「方而不割、廉而不剌、直而不肆、光而不耀。」（以上、58）。

聰明睿智天也、動靜思慮人也。：故曰「治人事天莫如嗇。」衆人之用神也躁、躁則多費、多費之謂侈。：故曰「夫

謂齋、是以蚤服。」知治人者其思慮靜、∴故曰「蚤服是謂重積德。」∴故曰「重積德則無不克。」戰易勝敵則兼有天下、∴故曰「無不克則莫知其極。」凡有國而後亡之、有身而後殃之、故曰「莫知其極。」莫知其極「則可以有國。」所謂有國之母、母者、道也、∴故曰「有國之母可以長久。」∴故曰「深其根、固其柢、長生久視之道也。」（以上、59）。（以下省略）

解老第二十所引の『老子』章序（38, 72, 58, 59, 60, 46, ?, 14, 1, 25, 50, 67, 53, 54）

『韓非子』喻老篇

「天下有道」（46）無急患則曰靜、遽傳不用、故曰「卻走馬以糞」（46）。「天下無道」（46）、攻撃不休、相守數年不已、甲冑生蟻蝨、翟雀處帷幄、而兵不歸、故曰「戎馬生於郊」（46）。

翟人有獻豐狐・玄豹之皮於晉文公、文公受客皮而歎曰、此以皮之美自爲罪。夫治國者以名號爲罪、徐偃王是也。以城與地爲罪、虞・虢是也。故曰「罪莫大於可欲」（46）。智伯兼范・中行而攻趙不已、韓・魏反之、軍敗晉陽、身死高粱之東、遂卒被分、漆其首以爲淅器、故曰「知足之爲足矣」（46）。（以下省略）

喻老第二十一所引『老子』の章序（46, 54, 26, 36, 36, 63, 64, 52, 71, 64, 64, 64, 47, 47, 41, 33, 33, 27）とあるように、一貫して（老子）の名は現れず、まったく「故老子曰」とはいわず、「故曰」といつて、誰のどの書籍かも不明である。しかも解老篇での第五十九章や第五十三章の解説の中で「書之所謂『治人』者、適動靜之節、省思慮之費也」、「根者、書之所謂柢也。曼根者、木之所以持生也」や「書之所謂『大道』也者、端道也、書之所謂『貌施』也者、邪道也。∴」と「書之所謂」といいながら、書名を示さないのは奇怪というほかない。管見のかぎりでは『韓非子』では唯一、六反篇に、

老聃有言曰「知足不辱、知止不殆」（44）。夫以殆辱之故而不求於足之外者、老聃也。今以爲足民而可以治、是以民爲皆如老聃也。

と老聃の名を示している箇所もある。六反篇の成立時期は不明であるが、「比較的晚い韓非後學」の作品(説)といわれていることからすれば、漢代の著作と考えられる。『淮南子』にも似たように、漢代の或る時期から『老子』は公然と通用するようになったから、六反篇の記述は不思議ではない(15)。

次に、『莊子』にみえる『老子』とほぼ同文の引用についてみると、約十六箇所に見られるが、これはすでに別稿で事例を挙げての考察を發表したので(16)、ここでは概略を述べる。『莊子』には多くの『老子』のことばが引用されている。しかしそれは殆ど老聃のことばとしては引用されず、『韓非子』解老・喻老の諸篇のばあいのように、「故曰」として引用されている。このことは、『老子』と同じことばは、當時は老子のことばとは認められていなかったことを意味しよう。

また「老子曰……」または「老聃曰……」とあつても、そこにみえることばは『老子』にはまったく見當らないものが殆どである。ただ例外的に「老子曰……大白若辱、盛德若不足(41)」「(寓言篇)と」「老聃曰、知其雄、守其雌、爲天下谿。知其白、守其辱、爲天下谷(28)。人皆取先、己獨取後、曰、受天下之垢(78)。人皆取實、己獨取虛。无藏也故有餘、歸然而有餘。其行身也、徐而不費、无爲也而笑巧。人皆求福、己獨曲全(22)」「(天下篇)のみに、老子または老聃のことばとして引用されている。他に庚桑楚篇で老聃の説く「衛生之經」にも『老子』と同じことばが少し認められる。そのほか老子のことばとはされていないが、先にも引用した「子獨不知至德之世乎。昔者容成氏、大庭氏……當是時也、『民結繩而用之、甘其食、美其服、樂其俗、安其居、鄰國相望、雞狗之音相聞、民至老死而不相往來』(80)。「(胠篋)の二重括弧の箇所が『老子』のことばとほぼ同じである。かくして寓言篇と天下篇は、『老子』が老子の著作乃至は老子のことばとされるようになって以後の著作ではないかと推測される。これは單なる憶測ではない。そのことは馬王堆出土の帛書の出現によって、さらには郭店楚簡『老子』の出現によって裏づけられるであろう。

このほか、制作年代や書籍の信憑性については不明だが、『戰國策』に「老子曰」として二條ほど『老子』と同文のものが引用されている。いまそれを提示すれば、

齊宣王見顔觸、觸對曰、觸聞、是以堯有九佐、舜有七友、禹有五丞、湯有三輔、是以君王無差亟問、不媿下學、是故成其道德、而揚功名於後世者、堯舜禹湯周文王是也。故曰、無形者形之君也、無端者事之本也。夫上見其原、下通其流。至聖人明學、何不吉之有哉。老子曰、雖貴必以賤爲本、雖高必以下爲基、是以侯王稱孤寡不穀。是其賤之本與（39）。（齊策四）

〔顔觸は（『史記』82、田單傳）に、顔歎は『漢書』20、古今人表、中上）にみえる〕

魏公叔痤爲魏將、而與韓趙戰滄北、禽樂祚。魏王說、迎郊、以賞田百萬祿之。公叔痤反走、再拜辭曰、：吳起之餘教也、：巴寧・爨襄之力也、：王之明法也、：王特爲臣之右手不倦、賞臣何也。：王曰、公叔痤豈非長者哉、：公叔何可無益乎。故又與田四十萬、加之百萬之上、使百四十萬。故老子曰、聖人無積、既以爲人、己愈有、既以與人、己愈多（81）。公叔當之矣。（魏策一）

というのがそれである。これらはすでに別稿で簡単に觸れたが故重澤俊郎教授は、時代的に齊の宣王、魏の惠王の時代に固有名詞としての老子なる人物が存在したことは躊躇を覺えるといい、經驗と思考に卓越した老者のことばではとの慎重な立場をとっている。當時の研究段階の結論からして固有名詞ではなからうという（17）。この見解は帛書出土以前であり、極めて注目すべき慎重なもので帛書の出現を豫見したともいえる。

次に帛書について、これは周知のように俗に甲本、乙本と呼ばれる二種類の『老子』とほぼ同文のもの及び古佚書が出土した（一九七三年一二月、湖南省長沙馬王堆第三號漢墓出土）。そのうち、甲本及びそれと同じ帛に書かれた古佚書には書名或は篇名或は章名がまったく附されていない。書寫の順序は、『老子』とほぼ同文が前に、その後には版本としては現存しなかった古佚書約四篇。それに對して乙本及びそれと同じ帛に書かれた古佚書には、書名或は篇名或は章名と字數が、文末に記されていて、書寫の順序は、古佚書四篇が前に、そのあとに『老子』とほぼ同文。篇名が記されているので、いま主として乙本によつて考察をすすめるが、考察は『馬王堆漢墓帛書（壹）』（文物出版社、1980年）の釋文

に依存する。

「老子乙本」（『老子』とほぼ同文）は、後に示すように《徳》《道》の二篇に分れる。
帛書『老子』章序（傍線部は『老子』の章序と異なるところ）

38,	39,	41,	40,	42,	43,	44,	45,	46,	47,	48,	49,	50,	51,	52,	53,	54,	55,	56,	57,	58,	59,	60,	61,	62,	63,
64,	65,	66,	80,	81,	67,	68,	69,	70,	71,	72,	73,	74,	75,	76,	77,	78,	79,	[徳]							
01,	02,	03,	04,	05,	06,	07,	08,	09,	10,	11,	12,	13,	14,	15,	16,	17,	18,	19,	20,	21,	24,	22,	23,	25,	26,
27,	28,	29,	30,	31,	32,	33,	34,	35,	36,	37,	[道]														

「老子甲本」及卷後古佚書（書寫順）——全六篇、無篇名。

「老子甲本」及卷後『古佚書』四篇—假篇名「徳經」「道經」「五行或德行」「九主」「明君」「徳聖」。「五行或德行」、趙岐「孟子題辭」所載「孟子外書・四篇（性善辯・文説・孝經・爲政）」（現存せず）と關係するか。

「老子乙本」及卷前『古佚書』（書寫順）——全六篇（含『老子』）、有篇名・章名。

《經法》（道法・國次・君正・六分・四度・論・亡論・論約・名理、經法）——凡五千（括弧内は、ほぼ章名及び最後は篇名）

《經》（立命・觀・五正・果童・正亂・姓爭・雌雄節・兵容・成法・三禁・本伐・前道・行守・順道・十大、經）——凡四千六〇〇六（同上）（18）

《稱》——千六百

《道原》——四百六十四

《徳》——三千四十一——「老子乙本」（『老子』下篇とほぼ同じ）

《道》——二千四百二十六——「老子乙本」（『老子』上篇とほぼ同じ）

卷前『古佚書』四篇は、『漢書』藝文志・諸子略・道家類所載の「黄帝四經」四篇（現存せず）と關係するか。多くの研究者は『經法』以下四篇をそれに同定する。

さて、乙本の體裁からして、『老子』と同文の書名とおぼしきものが明らかになり、『德』『道』が篇名とほぼ推定できる。（『老子』）という書名はどこにもみえない。『史記』の傳記で「道德之意」を述べたと記されているが、その記述とは或は合致するかもしれない。

また甲本と乙本では避諱（ただし嚴密ではない）の相違から書寫年代を推定して、甲本が古いとしている。

甲本 高祖（劉邦）、高后（呂雉）の諱を避けず。

乙本 惠帝（劉盈）、文帝（劉恆）の諱を避けず。「邦」を避けて「國」とする。

〔例文〕

○…大盈若溢（沖）、其用不窮（窘）。大直如詘（屈）、大巧如拙。（甲本・乙本）

…大滿若孟、其用不窮、大直若詘（屈）、大巧若拙。（傳奕本、（45））

○…獵射雉（兕）虎、必勝之、主非弗樂也。（甲本『古佚書』、明君）

○…萬物尊道而貴德、道之尊也德之貴也、夫莫之爵也而恆自然也。（甲本・乙本）

…萬物莫不尊道而貴德、道之尊德之貴、夫莫之爵而常自然、（傳奕本、（51））

○以邦觀邦、以天□觀□□、（甲本） □□□國、以天下觀天下、（乙本）（傳奕本、（54））

○以正之邦、以畸用兵、（甲本） 以正之國、以畸用兵、（乙本）（傳奕本、（57））

○大邦者下流也、（甲本） 大國□□□□、（乙本）（傳奕本、（61））

この帛書乙本から、『老子』に相當する書籍の名稱が『老子』ではなく、『德』篇『道』篇であることが明らかになっ

た。乙本卷前古佚書が、『漢書』藝文志に記載されている「黄帝四經、四篇」だとする研究者が多い。《經》にはほんの少しではあるが、「黄帝」の名がでてくるので、藝文志に記載されながらこれまで現存しなかった『黄帝四經』だとするのは、四篇という篇数とも合致することには確かである。いま假にそうだとすれば、『老子』に相當する帛書は《德篇》《道篇》と呼ばれるのが正當なのではないか。帛書甲本は〈老子〉の書名がない。『韓非子』解老・喻老の諸篇にも〈老子〉の書名がなく、『莊子』所引の多くにも〈老子〉の書名がないとすれば、『老子』は、もとは『老子』という書名ではなかったといえよう。

さらに一九九三年冬、湖北省荊門市郭店一號楚墓より出土した、三種類の『老子』とほぼ同文の竹簡(断片的ではあるが)にも〈老子〉の書名はまったくみえないことも考慮すべきであろう。今後、〈老子〉の書名の文献が新たに出土した暁には、この假説も改めることになるろう。

結 語

これまで老子なる人物と書籍について検討してきたが、事實として諸文献を搜索した限りでは、『老子』はもともと〈老子〉と呼ばれた書籍ではなく、或る時期からそう呼ばれるようになり、道家の代表的著作でいわば絶對的權威をもつようになったものである。また、老子なる人物も實際はいかなる出自のいかなる時期の人物であるかは不明だというのが事實であり、後に如何にして『老子』の著者とされ、道家集團での最高位の人格の一人である「太上老君」としてあがめられるようになったのかも明らかではない。老子なる人物と『老子』なる書籍は、中國社會や思想史の上での限りなく大きな役割を果たしたし、限りなく大きな影響を及ぼした。それはそれとして評價し研究するに値するし、現にそうしたことに多くの研究者が携わっている。ただそうした後代の現實は現實として、そもその源流はいかなるものであ

ったかの事實も究明してみる價值のあることと思う。人が考えて作りだした思想史なるものは一體いかなるものなのか、それはどのようにして作られるものなのか、しかも所謂眞實なのかを知っておくのもまた必要なことであろう。そうした點への究明は今後もなされていくであろうが、そうした究明の一助になればとも思ひこの小論を草した。(2005.2.1稿、2005.3.20補訂)

注

(1) 初刊は一九二六年、東京弘文堂。のち『武内義雄全集』第五卷、老子篇(角川書店、一九七八年)所收、五八頁以下、参照。

以下、武内氏の説の引用頁数はすべて全集本による。

(2) 初刊は一九二七年、東京改造社。のち前掲『武内義雄全集』第五卷、所收、二六一頁以下、参照。

(3) 通行本は「姓李氏、名耳、字聃」に作るが、先學の種々の指摘があるように(『老子原始』、『武内義雄全集』第五卷、所收)、「名耳、字聃、姓李氏」とすべきであろう。例えば『後漢書』桓帝紀・延熹八年「春正月：祠老子。」の注に、『史記』曰(老子

者、楚苦縣厲鄉曲仁里人也。名耳、字聃、姓李氏。爲周守藏(史)。(史)。(史)とある。また『史記』の列傳にも「商君者、衛之諸孽公子也、名軻、姓公孫氏、其祖本姬姓也。」(卷六八)「孟嘗君名文、姓田氏、文之父曰靖郭君田嬰。」(卷七五)「春申君者、楚人也、名歇、姓黃氏。」(卷七八)などと、姓・名の順ではなく、名・姓の順となっていることも参考になろう。

(4) 孔子が老子に「禮」を尋ねるなどの説話は『禮記』(會子問)に、次のようにみえる。

○會子問曰、古者師行必以遷廟主行乎。孔子曰、天子巡守、以遷廟主行。…天子崩、國君薨、…吾聞諸老聃、曰、天子崩、國君薨、則祝取羣廟之主、而藏諸祖廟、禮也。卒哭成事、而后主各反其廟。…老聃云。

○會子問曰、葬引至于壙、日有食之、則有變乎、且不乎。孔子曰、昔者吾從老聃、助葬於巷黨、及壙日有食之。老聃曰、丘、止柩

就道右、止哭以聽變。既明反、而后行、曰、禮也。反葬而丘問之曰、…老聃曰、諸侯朝天子、見日而行、逮日而舍奠。…

○曾子問曰、下殤土周葬于園、遂…今墓遠、則其葬也如之何。孔子曰、吾聞諸老聃、曰、昔者史佚有子而死。下殤也、墓遠。召公謂之曰、…周公曰、…

○子夏問曰、三年之喪、卒哭金革之事無辟也者、禮與、…孔子曰、吾聞諸老聃、曰、昔者魯公伯禽、有爲爲之也。今以三年之喪、從其利者、吾弗知也。

(5) 武内前掲書(1)は、『大戴禮』曾子制言上やここに引用した『莊子』外物篇に、老萊子の言としてみえると指摘する。

この資料から見る限り、老萊子は孔子に忠告する先輩的な人物であり、孔子への老萊子の忠告は、先に見た李耳の孔子への忠告の一部と酷似するとの先學の指摘は妥當といえよう。

(6) 武内前掲書(1)は、類似の語が、『莊子』天運にみえると指摘する。

(7) この三句は、李耳に關しての記述と思われる。ただ老子の事實上の壽命であつたかどうかは保證の限りではない。

(8) ○印以下の二句は、唐の司馬貞の『索隱』も「此太史公因其行事、於當篇之末結以此言、亦是贊也。按、老子曰(我無爲而民自化、我好靜而民自正)、此昔人所評老聃之德、故太史公於此引以記之。」というように、司馬遷の評語の引用であろう。

(9) 拙稿「『莊子』所見老聃考」(『汲古』第二八號所收、一九九五年)参照。

(10) 下見隆雄「老萊子孝行説話における孝の眞意」(『東方學』第九二輯、所收)には老萊子が隱遁者ではなく、孝行者としての説話が傳承されている。最古のものは『孟子』萬章上篇の後漢の趙岐注にみえ、唐の徐堅『初學記』卷一七、孝、唐の歐陽詢『藝文類聚』卷二十、人部、孝に、彼のその方面に關する多くの話がみえる。

(11) 顧頡剛は「儻即老子」という。「『史記』的『老子傳』」(『古史辨』第六册下編所收、一九六三年、一九三八年初版)参照。

(12) 膠西王印については、『史記』卷五十二、齊悼惠王世家に「齊悼惠王劉肥者、高祖長庶男也。…高祖六年、立肥爲齊王、…悼惠王即位十三年、以惠帝六年卒。子襄率、是爲哀王。…孝文帝元年、…是歲、齊哀王卒、太子(則)立、是爲文王。…(齊文王)二

年、濟北王反、漢誅殺之、地入于漢。後二年、孝文帝盡封齊悼惠王子罷軍等七人皆爲列侯。齊文王立十四年卒、無子、國除、地入于漢。後一歲、孝文帝以所封悼惠王子分齊爲王、…子卬爲膠西王、…とある。この記述によれば、すなわち劉卬は文帝期の人物である。

(13) この『經典釋文』の「相余注」は、『老子』想爾注のことと推定される。「想爾注」については、饒宗頤『老子想爾注校箋』(上海古籍出版社、一九九一年)がある。「道篇」の部分の寫本が殘存しており、その注を河上公注と比較している。結論としては河上公注の方が古いであろうとのこと。しかも「想爾注」は張道陵の著作ともいわれるとのこと、そうなると河上公注は、魏の王弼注よりも古いことになり、『老子』の最古の完全な注釋ということになる。

(14) 「從『呂氏春秋』推測『老子』之成書年代(二)」(『古史辨』第四冊所收、一九六三年、一九三三年初版)

(15) 木村英一『法家思想の研究』(弘文堂書房、一九四四年)附録「韓非子考證」比較的古い韓非學派の手に出た諸篇」參照。なお、容肇祖『韓非子考證』(合聯國風出版社、一九七二年重刊)は、内容からみて韓非の自著と同じ手になる作品とする。

(16) 拙稿「『莊子』所見老聃考」(『汲古』第二八號所收、一九九五年)參照。

(17) 重澤俊郎「思想史的に見た戰國策の諸問題」(『中國の文化と社會』第八輯、一九六〇年)。拙稿「郭店本『老子』攷(二)」(廣島大學東洋古典學研究會『東洋古典學研究』第十七集所收、二〇〇四年)で故重澤教授の説を簡單に紹介した。

(18) 乙本古佚書に收められた四篇は、初め「經法」「十大經」「稱」「道原」と釋文されて發表された。やがて帛書では「大」と「六」が極めて近似していて、どちらとも解讀できることから、「十大經」は「十六經」と解讀されて、『馬王堆漢墓帛書(壹)』(文物出版社、一九八〇年)では「十大經」としてほぼ定着したかの感があった。しかしこの篇は十六章はなく、(立命・觀・五正・果童・正亂・姓爭・雌雄節・兵容・成法・三禁・本伐・前道・行守・順道・十六經)一凡四千六〇〇六と明白な章名は十四章で、順道章に續く短い文章があるが、一章の體をなしていないとみなされ、章名をつけず、文末の「十六經凡四千六〇〇六」に續けてしまい、章名なしの文章でこの篇は終わっていた(なお『經法』(文物出版社、一九七六年)では經篇の字數は「四千〇〇六」

であったが、先の一九八〇年版では「四千六〇〇六」と釋文されている。この〇の前の字は判讀しがたく、「六」と解するのは無理があった。李氏は「四千五十六字」と推定している。しかしこれらの文章を一書とみるか一篇とみるかはとにかく、無名の文章で終わり、直ちに篇名乃至書名がくるのは不自然である。その上、章數も十六章なく、「十六經」との名稱にそぐわず十四章プラスαという變則的構成であるため、篇名は確定はしない状況であった。陳鼓應氏は、全體の書名（陳氏は「十大經」と釋文し、書名と考えている。）については『十大經』としている。そして末尾の篇名不明の文章に、獨自にその内容から「名刑」篇と命名して獨立の文章とした。すなわち「名刑」（篇または章）で終わり、書名乃至篇名がくるとした。だが、書名は『十大經』として残している（陳鼓應注譯『黃帝四經今註今譯』（臺灣商務印書館、一九九五年）。「名刑」の篇名は陳氏の創作で決定的な根據はない。

ところで、すでに李學勤「馬王堆帛書《經法・大分》及其他」（『道家文化研究』第三輯、所收、一九九三年）では、經法篇と同じくこの無名と思われていた章を含む「立命」以下の諸章にはすべて章名がありその章の終わりに章名がつけられ、その後には篇名があるのが當然だとして、内容も検討した上でこの篇の最終章の章名を「十大」、篇名を「經」とするのが妥當だとの説を提出していた。これは極めて穩當な見解であると思われる。また《經法篇》の中の従來は「六分」章についても「十分」章とすべきだとの見解を提出しており、最近出版された谷斌・張慧妹・鄭開注譯『黃帝四經・道德經注譯』（中國社會科學出版社、2004年第二版、第一版は未見）では、李氏の見解を採用し、従來の「十大經」「十六經」に替えて「十大」章を加え、全體を《經篇》とし、「六分」章を「十分」章としている。いま李氏の「十大」章、《經篇》の説については以下これに従う。ただし「十大」章及び《經篇》の字數については、一九八〇年版のままにして後考を待ちたい。以下、《經篇》については李氏の説に従って記述する。篇名の表記がこれまでの見慣れた乙本古佚書の表記と異なることをお断りしておきたい。